～未来のために～ いま

明石市立二見中学校
第３学年(72 回生)学年通信
2019(令和元) 年 ８月２９日
第２０２号

# 体育大会の練習が始まりました。

**今年の体育大会の目標は**

「全員が積極的に参加し、個人、学年、学校で決めた目標を達成できる体育大会」

**そして、スローガンは**

「力戦奮闘　令和の主役へ」

に決まりました。いよいよみんなにとって中学校生活最後の体育大会です。運動することが得意な人も苦手な人もクラスや学年の仲間と一緒に何かに取り組むことの楽しさをたくさん味わってほしいと思います。真剣で一生懸命な姿は、周りの人々を感動させ、勇気や喜びを与え、また自分自身の成長にもつながるはずです。





＜第１回全校練習より＞

## 「さとうきび畑の唄」を観て‥

・この映画を見て、家族の温かさや戦争がいかに人を傷つけて良くないことだということが分かりました。私は家族が大好きだけど、時々嫌になってしまうときがあります。でも、この映画を見て、家族や友だち、周りの人がどれほど大事なものかということを知れました。また、戦争は人を狂わせます。映画の中でも、一番上の人や、アメリカ軍のことが嫌いな人は、同じ人間であるアメリカ人や同じ仲間の日本人でさえ「人を殺したくない」「死なせたくない」という人たちを容赦なく殺してしまいます。そういうところを見て、頭おかしいやろと思いました。しかも学生や一部の大人たちは違う情報を信じて天皇のために死ねるのだから良いことと思い込んでしまっていることが、とても悲しかったし、今の現代社会には考えつかないことだと思いました。戦争が起こっていた世界はどんなに苦しいことか、私は実際幸運なことに平和な世の中で生きることができています。映画の中でも戦争で解決できることなんて一つもないということ。また生きることは一生分の宝、人を殺すため、自分で命を絶つために生まれてきたのではない。この一度限りの人生を悔いなく一生懸命生きたいと思います。

・さとうきび畑の唄を見てまず思ったことは、戦争はほんとうにだめだということだ。国のために死を選ぶというものが立派と考える人たちのことが全く分からない。国のためとはいえ、自分が死ぬということは家族を悲しませるし、友人や恋人のことも悲しませるということになる。でも、そこで逃げ出す者は、この戦争時代では恥だという考えがあり、意味が分からない。家族が一人ずつ死んでいく姿は、とても胸が苦しくなるシーンだった。舞台は沖縄で、僕らも１学期修学旅行で沖縄に行き、平和学習で戦争について学んだ。壕などに入り、真っ暗で何も見えない状態で、この中で怯えながら暮らしていた人たちはどれほど恐怖だっただろうか。そしてこの中で自決や餓死をしてきたのかと思うと可哀そうで、誰かが悪いというわけじゃないけど、なんだか許せなくなってくる。戦争のことを知ってもらうための平和学習をし、もっと多くの人たちに事実を学び、いかにこの時代が厳しいものだったか心の底から知ってほしい。

・改めて戦争の怖さが身に染みました。時々目を開けて見れないほどの悲惨な映像が流れました。とても苦しく残酷でした。それを当時の人たちは、目の前で見たとなると、どれだけの心の傷を負ったのかと思うと、言葉が出ません。映画中、仲間由紀恵さん演じるのり子さんが言っていましたが、「戦争が起きても何も変わらない」私もその意見と全く同じです。昔も今も誰しもが母、父に恵まれ望まれ生まれてきているはずです。しかし、“お国のために”“天皇のために”命を簡単に捨てていく兵隊さんたちを見ていると、見ているのが辛いです。暗い洞窟の中で怖くて目をつぶり外からの光さえなく、目を開けた時には横にいる家族や友達が生きているのかどうか、死が目の前にある中で必死にもがきながら生きようとする人たちがたくさんいました。「さとうきび畑の唄」を見て改めて今の平和な生活について考えることができました。今の生活にはたくさんの犠牲が重なり合って出来たものだと思います。だからこそ、過去のことで戦争は終わったことだとしても、それと向き合い受け止めて１人１人がしっかり平和について考え直し、これから先の後世の人たちに伝えていきたいです。いつかこの世の中が平和で満ち溢れるように。

・私は今日の「さとうきび畑の唄」という映画を見るのが初めてだったので、とても楽しみにしていました。沖縄での修学旅行で学んだ沖縄の地上戦などが、リアルに描かれていて、とても怖かったです。それまで、幸せに暮らしていた家庭が一気に崩れて、地獄へと変わるのは、おどろくほど一瞬すぎて、泣きそうになりました。結婚して数日しかたっていない長男が戦争の日本兵として、軍へ強制的につれていかれるという現状に、その妻はとても悲しかったと思いますが、仕方ないことだと割り切って、涙の一つも見せず、「元気でね。」と送り出しているシーンをみると、とても心が痛みました。実際に米軍が沖縄へ上陸したとき、戦車や戦闘機など、日本と比べ物にならないほど、強力な武器を次々に出してきて、「こんなのもう人間のすることじゃない。」と私はその時に改めて思いました。この映画を見て、私はこの悲劇を忘れず、それを未来につなげていきたいなと思いました。今の日本は戦争もなく平和ですが、この平和をつくってくれたのは戦争という悲しい過去があったからだと思います。私や、今から生まれてくる人たちは、戦争というものを体験したことがありません。だから、今ある生活があたり前になっていますが、これからは、今、何不自由なく生活ができていることに感謝しながら生活をしていきたいなと思います。もう、戦争という悲劇が二度と繰り返されないように。